2015年3月17日発行(創刊2002年3月31日)

仙台文学館ニュース

第二十八号

Sendai Literature Museum News

旧仙台医学専門学校第六号　魯迅の階段教室

文学のある風景

惜別

第二学年のおわりに私は藤野先生を訪ねて、医学の勉強をやめたいこと、そして仙台を離れるつもりだと告げた。かれは顔をくもらせ、何か言いたげだったが、何も言わなかった。

「ぼくは生物学を学ぶつもりです。先生に教わった学問はきっと役に立ちます」私は生物学をやるつもりなど毛頭なかったが、落胆ぶりを見かねて、慰めるつもりで嘘をついた。「医学として教えた解剖学など生物学にはあまり役に立つまい」かれは嘆息した。

出発の数日前、かれは私を家に呼んで写真を一枚くれた。裏に「惜別」と二字書いてあった。そして私の写真もと乞われたが、あいにく手もちがなかった。あとで写したら送ってくれ、それから折にふれ手紙で近況を知らせてくれ、とかれは何度も言った。

仙台を離れたあと、私は何年も写真をとらなかったし、不安定な状態がつづいて、知らせても失望させるだけだと思うと手紙も書きにくくなり、たまに書きたいと思っても容易に筆がとれなかった。こうして現在まで、ついに一通の手紙、一枚の写真も送らずにしまった。あちらからすれば梨のつぶてのわけだ。

だがなぜか私は、今でもよくかれのことを思い出す。わが師と仰ぐ人のなかで、かれはもっとも私を感激させ、もっとも私を励ましてくれたひとりだ。

（魯迅「藤野先生」）

「藤野先生」
『魯迅文集』竹内好訳
第二巻所収
（1987年　筑摩書房）

小池　光の 気になる日本語 17

「ご亭主」

この前、歌をつくりに、例によってふらふらと北上する電車に乗り、しばらく乗ったので降りてそこらを散歩しようと、次の駅で下車した。そこは東北本線の片岡というところ。

降りてはみたが駅舎が改装中でパネルで囲まれ、どこが改札口かわからない。

そこでうろうろしていると一緒に降りた見も知らぬおばあさんが、改札はあっちあっちと教えてくれた。それでその方に向かって歩きだすと、さっきのおばあさんが今度は大声で、「ご亭主、ご亭主、間違った、改札はこっち」と言う。

「ご亭主」と呼びかけられたのは生まれてはじめてである。最初誰にむかって言っているのか分からなかった。じぶんは「ご亭主」なんだと思って、しばらくそのことばが脳裏を離れずにいた。へんだとも思ったが、また妙に新鮮にも思われた。

名前を知らない相手をなんと言って呼びかけるかということはなかなかむずかしい。適切な日本語が見当たらないという場合が少なくない。

「お隣りのご主人はよく働くね」

という夫婦の会話はありふれたもので、なんの違和感もなくわれわれはこう使っているが、その気になって考えれば少しへんではあるまいか。「ご主人」が気になる。夫と妻がまるで主人と家来のようである。男女同権の建前に合わない。「ご主人」に代わって「旦那さん」などというとさらにもその「階級性」が濃厚になる。

女性を呼ぶ場合の「奥さん」というのもありふれた日本語だが、奥まったところに隠れて暮らしている存在が語源だろうし、現状と合わない。奥になんかちっともいないし、そもそも今日の住宅事情において家の「奥」などという場所はないのである。

最近出てきた用法で、若い人達が使うことばに、じぶんの妻を言うのに妻と言わず「嫁」と言うのがある。

「これがうちの嫁です」

なんて言って紹介されたりする。

「妻です」「家内です」なんて言わない。わたしにとってこれは相当違和感ある語で、「うちの嫁」なら息子の配偶者を指すのがこれまでの日本語である。じぶんのつれあいを本人が「嫁」とは言わなかった。「ご主人」や「奥さん」に抵抗があるように「妻」「家内」に抵抗がある感覚があってこう使われるようになってきたと思えば、その気持ちはわからないわけではないけれど。

学芸室日記

○9月23日、秋の特別展「いわむらかずお絵本原画展」に合わせ、いわむらかずおさんのお話会&サイン会を行いました。開館前から親子連れの姿が見られ、館内は多くの方で賑わいました。お話会では読み聞かせに加え、ご自身の美術館の周囲の森林で出会った小さな動物たちの映像を紹介しながら創作秘話を明かしてくださいました。11月3日には、太白山自然観察の森レンジャーさんにご協力いただき、文学館の森を散歩する自然観察会も開催。参加者は小雨の中、いわむらさんの作品に描かれる草花や小さな動物たちを想いうかべながら、しっとり濡れる落葉を踏みしめていました。

○11月24日、絵手紙教室を開きました。これは毎年開催している新春ロビー展「100万人の年賀状展」に合わせた企画で、日本郵便株式会社東北支社の協力のもと、青少年ペンフレンドクラブアドバイザーの方にアドバイスをいただきながら年賀状を作るというもの。絵手紙に挑戦する方、紙を貼ったりスタンプを押したりしながら作る方、皆さん楽しそうでした。1月10日からの100万人の年賀状展には、この時に作られた作品はじめ、干支の羊がデザインされたものや、昨今人気の「ゆるキャラ」からの年賀状も集まり、とても賑やかでした。

○1月18日、企画展「大佛次郎　大池唯雄　こころの往復書簡」の文学サロンを開催しました。大佛次郎が『天皇の世紀』を執筆した際に、資料収集や索引作成を手掛け、取材旅行にも同行された元北里大学教授の手塚甫（はじめ）先生にお越しいただきました。誰に対しても分け隔てのない人柄について、また『天皇の世紀』には「人として何を大切にするか」という大佛の視点が表出していることなどを、わかりやすくお話しくださいました。大佛家でお手伝いをされていたという方もお見えになり、大佛の執筆の様子などを懐かしそうにお話しされていました。資料からだけでは知ることができない、作家の素顔を知ることができた一日でした。

仙台文学館ニュース　第二十八号

仙台文学館 Sendai Literature Museum
〒981-0902 仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
http://www.sendai-lit.jp/

［表紙写真］佐々木隆二
［印刷］（株）コーメディア
［挿画］古山 拓

再生紙使用　VEGETABLE OIL INK

シリーズ 私の一冊 第二十三回

『木曜の男』

扇田 昭彦

私の愛読書で、今でもよく読み返すのが、英国の作家・評論家で、カトリックの論客でもあったG・K・チェスタトン（一八七四～一九三六年）の小説『木曜の男』（吉田健一訳、創元推理文庫）である。

原書の刊行は一九〇八年で、翻訳が東京創元社の推理文庫に入っているから確かにミステリーなのだが、機知に富んだスリリングで奇想天外な展開は唖然とするほど。読み進むうちに、これは推理小説の次元を超えた一種の哲学小説、神学小説でもあることが分かってくる。

この小説を初めて読んだのは、私が三十代だった一九七〇年代の後半だった。チェスタトンはブラウン神父ものの短編推理小説の作者として知られ、私もこのシリーズはかなり読んだが、長編『木曜の男』はこれらとは別格の作品だった。

吉田健一の翻訳がまた魅力的で、その独自の、一種魔術的とも言える文体に触れると、いつまでもその中に浸っていたくなる。吉田訳によるイヴリン・ウォーの小説『ブライズヘッドふたたび』、E・M・フォースターの『ハワーズ・エンド』も好きだが、『木曜の男』も個性的な名訳である。『木曜の男』には、最近の新訳も含めていくつか翻訳があるが、吉田訳がなければ、私がこの小説にこれほど夢中になることはなかった。

若い詩人で、ロンドン警視庁の刑事でもあるガブリエル・サイムはある夜、無政府主義者の詩人に連れられて、テロリストたちの秘密結社に潜入する。身分を隠して、結社の幹部「木曜」に選ばれたサイムは、「日曜」と呼ばれる謎の巨魁（きょかい）が支配する結社の中央会議に単身乗り込む……。

ミステリーなので、これ以上、筋を紹介するのは控えるが、この小説と井上ひさしの晩年の戯曲『箱根強羅ホテル』（二〇〇五年、新国立劇場で初演）との間には重要な共通性があることは言っておいてもいいだろう。井上氏は『「ブラウン神父」ブック』（春秋社、一九八六年）という本の編者を務めるほどのチェスタトン通だったから、氏はおそらくチェスタトンへの賛辞を込めてこのミステリー風の劇を書いたのだろう。

『木曜の男』の前半で詩人サイムが論争や演説で示す才気の切れ味、秘密結社をめぐるサスペンスに富む悪夢のような描写がすばらしい。だが、後半、サイムらの追跡を受けた「日曜」が大きな象に乗ってロンドン市中で逃走を続けるなど、物語は一挙に、まるで超現実的でナンセンスなドタバタ喜劇のような様相を強めていく。笑いのあるミステリーなのだ。

『木曜の男』は今も自宅のベッドのそばに置いてある。海外旅行に出かける時もたいてい持参して、飛行機の中で読み返す。だから昔買った文庫本は表紙が取れてしまった。現在の版は表紙のデザインが変わったが、愛着がある昔の文庫本は今も手放せない。

『木曜の男』に初めて触れたころ、私はチェスタトンの評論『正統とは何か』（安西徹雄訳、春秋社、一九七三年）も読んで、この作家にさらに傾倒した。翻訳もすばらしいのだ（初版当時は福田恆存と安西の共訳と表記されたが、その後、安西氏の単独訳になった）。

これはチェスタトンが、カトリックの立場から二十世紀はじめの英国の進歩思想家たちに論争を仕掛けた本だ。私はキリスト教の信者ではないが、卓抜なレトリックとユーモラスな機知を駆使する彼の名台詞のような文章には強く心を動かされた。その共感は今も続いている。例えば、次のような文章。

「自己を信じるなぞということは、ろくでなしの何よりの証拠にほかならぬ。芝居のできぬ役者にかぎって自己を信じている」

「想像は狂気を生みはしない。狂気を生むのは実は理性なのである。詩人は気ちがいになりはしない。（中略）数学者は気ちがいになる。それに出納係。だが創造的芸術家はめったにならない」

「おとぎ話は空想ではない。おとぎ話に比べれば、ほかの一切のもののほうこそ空想的である」

「子供はいつでも『もう一度やろう』と言う。大人がそれに付き合っていたら息もたえだえになってしまう。（中略）しかし、神はおそらく、どこまでも歓喜して繰り返す力を持っている。きっと神様は太陽に向かって言っておられるのにちがいない――『もう一度やろう。』／自然界の繰り返しは、単なる反復とはちがうのではあるまいか。実は（神による）アンコールではあるまいか」

こうした文章を読むと、私たちの生活とまわりの風景もそれまでとは確実に違った形で見えてくる。

扇田 昭彦（せんだ あきひこ）

1940年生まれ。元・朝日新聞学芸部編集委員。日本演劇学会理事。専門は日本の現代演劇とミュージカル。『井上ひさし全芝居』全7巻（新潮社）の解説を執筆。著書『井上ひさしの劇世界』（国書刊行会、2012年。AICT演劇評論賞）がある。その他の著書に『日本の現代演劇』（岩波新書）、『ミュージカルの時代』（キネマ旬報社）、『舞台は語る』（集英社新書）、『才能の森――現代演劇の創り手たち』（朝日選書）、『唐十郎の劇世界』（右文書院）、『蜷川幸雄の劇世界』（朝日新聞出版）など。

『木曜の男』
G・K・チェスタトン著　吉田健一訳
（1977年　東京創元社刊）

扇田昭彦さんが選んだ

井上ひさしの戯曲の代表作3本

仙台文学館ゼミナール2014「井上ひさし作品を読む」で、井上戯曲の魅力を読み解いてくださいました扇田昭彦さんに、無理をお願いして、井上ひさしの戯曲の代表作3本を挙げていただきました。

井上ひさしは生涯に約70本の戯曲を書いた。しかも、名作、傑作と言える作品はとても多い。代表作が数本程度の劇作家とはスケールが違うのだ。

だから、代表作を3本に絞るのは不可能に近い。だが、喜劇好きな私の好みからあえて選ぶと、次の3作になる。いずれも初期、中期、後期を代表する喜劇性豊かな傑作である。

①『日本人のへそ』（1969年初演）
②『頭痛肩こり樋口一葉』（1984年初演）
③『円生と志ん生』（2005年初演）

劇作家としての井上ひさしの実質的なデビュー作となった①は、その後の井上ひさしのすべての要素が入った才気あふれる快作。例えば人物の一代記、盛大な笑い、凝った言葉遊び、鋭い社会批判、歌を多用する音楽劇スタイル、どんでん返しなどの奇抜な趣向。

②は、虚実ない交ぜの大胆な手法で描いた樋口一葉の評伝劇の傑作。女性だけ6人の登場人物、悲劇的なものをも笑いで描く趣向など、井上ひさしの劇作術の成熟を示す名作。

③は、後期を代表する音楽劇スタイルの傑作。劇中で2人の落語家が語る「笑い」論は特に重要。

特別展 北杜夫 どくとるマンボウの生涯

軽井沢にて

二〇一一年に八十四才で亡くなった作家・北杜夫は、ユーモアあふれる作品を多数残し、「笑い」という要素があまり重視されてこなかった近現代日本文学において、特異な小説家でした。そのユーモアは「どくとるマンボウ」シリーズに顕著に現れており、一連の作品は、堅いイメージがつきまとう活字を親しみやすいものにし、多くの読者から愛されてきました。

一方で『夜と霧の隅で』や『楡家の人びと』といった純文学作品においても、その想像力や構想力、テーマ性、文体などの点で文壇および読者から高い評価を得ており、現代の作家にも大きな影響を与えています。

本展では、直筆の原稿やノート、日記などを通し、その独創性と優れたユーモアの感覚に迫ります。また、小説家としてのキャリアを歩み始めた、仙台時代の足取りもご紹介します。

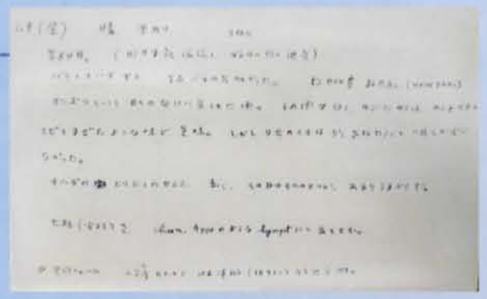
会期
2015年4月25日(土)
～6月28日(日)

北杜夫と仙台

北杜夫(本名・斎藤宗吉)は、一九四八(昭和二十三)年から一九五三(昭和二十八)年にかけて、東北大学医学部の学生として仙台に下宿していました。医学部に入学したのは、将来を心配した父・斎藤茂吉に説得されたためであり、心の中ではすでに作家になることを決めていました。そのため、授業に出席することは少なく、学校にいても読書や卓球をしていることが多かったようです。また、喫茶店で愛読書『トニオ・クレーゲル』をくり返し読んだり、娯楽の少なかった当時の仙台で流行していたダンス教室に通っていたこともあります。旧制松本高校在学中に詩や歌を作り始めていた北でしたが、この頃には雑誌へ小説を投稿するようになっており、仙台時代は「小説家・北杜夫」が形作られた重要な期間でした。

東北大学時代

航海日記



北は31歳のとき、水産庁漁業調査船「照洋丸」の船医としてヨーロッパへ航海した。のちのベストセラー「どくとるマンボウ航海記」へとつながった、航海当時の日記には、マンボウを食べた記述もある。

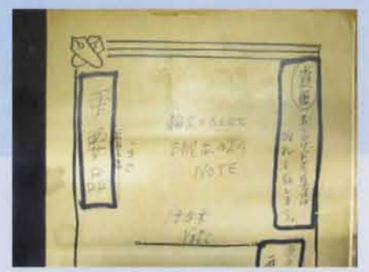
1.9(金)　晴、雲あり、うねり。

マンボウという形の面白い魚とれた由。その肉は白く、ゆでた奴は、カニとイカとエビをまぜたような味で美味。しかし夕食のときは少し気持わるくて一片しか食べなかった。

東北大学時代の日記

北は1945年から日記を書き始めており、東北大学在学中にもノート8冊分の日記を残している。日記からは、思うように創作が進まない苛立ちや、文学仲間が近くにいない北の孤独が垣間見える。

『楡家の人びと』創作ノート



「楡家の人びと」の舞台「楡脳病院」は、生家「青山脳病院」をモデルに書かれている。執筆にあたり北は入念に準備しており、ノートには小説の構想や家族・関係者への取材などがまとめられている。

マンボウの直筆絵画

北は躁病期に水彩画に熱中していた時期があり、山や馬、昆虫、マンボウ、阪神タイガースなど自身にとって身近なテーマを描いた。

北家訪問

一月下旬、資料調査のために、北家(斎藤家)にお邪魔しました。お迎えくださったのは、喜美子夫人。数えきれぬほどの写真や資料を見せてくださいました。生前は手をつけることを許さなかったという二階の書斎を、現在少しずつ整理されているとのこと。最近、作家を目指していた大学時代の投稿作品が掲載された雑誌が見つかったそうです。「物を捨てないでとっておく人でした」と懐かしそうにお話しくださいました。

生前、沢山あった書籍の数々を一括古本屋に処分。現在書棚に残るのは大切にしていた本。

イベント

小池光ことばのセッション Vol.9
「斎藤由香さん(北杜夫・長女)を迎えて」5月23日(土)13時半から

この他、宮田毬栄氏(エッセイスト・文芸誌『海』元編集長)、石原千秋氏(早稲田大学教授)の講演会や、展示室リーディングを開催予定。

※詳細は仙台文学館にお問合せください。

『どくとるマンボウ青春記』(1968年　中央公論社)旧制松本高校や東北大学での思い出が記されている。

在学時代に作品「狂詩」が掲載された文芸誌『文芸首都』。

東北大学医学部(東北大学史料館提供)

不定期企画

オッス！ 製本研究班

日本に洋式製本技術が導入されたのは明治初期、当時は製本機械がまだ普及しておらず、そのほとんどが手作業で成り立っていました。大正時代に入ると、徐々に製本機械の国産化が進み、日本の近代製本の下地がつくられました。（参考：「東京都製本工業組合」ホームページ）

仙台文学館には、そうした時代に発行され、百年近くの時を生きてきた本が数多く所蔵されています。今あらためて、その構造や印刷の具合、紙面のレイアウト、文字組み、字体などをよく見てみると、普段見慣れた本との違いや新鮮な魅力に気付きます。

新企画「製本研究班」では、製本やデザインの現場に関わるプロを迎え、仙台文学館の所蔵資料をブックデザインの視点で観察することで、新たな資料の魅力を発掘していきます。

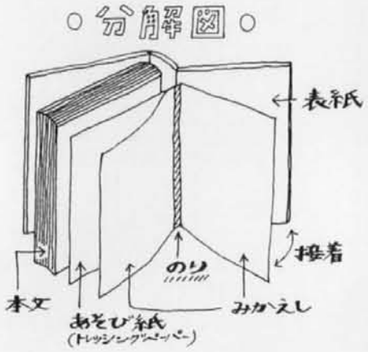
協力 **「製本部」**

仙台のグラフィックデザイナーやイラストレーター、紙メーカー職員たちが集まり、各々の専門知識を共有しながら、製本の可能性を追求することを目的として活動。

今回の本

『裾野』（大正六年三月　菊屋出版部）

今回取りあげた本は、青森県生まれの小説家・俳人・劇作家の佐藤紅緑の作品。医者・葉山浩蔵とその家族である妻・峰子、二人の娘・富士子、假名子らの金と嫉妬と欲にまみれ、波乱に満ちた関係が描かれる。前年には紅緑が顧問を務めた「日本座」で上演もされている。



観察

○箱

箱を組み立ててから、紙を貼り、型でくり抜かれていることがわかる。

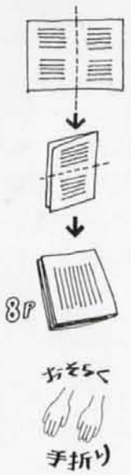
○表紙

表と裏で異なる印象の表紙だが、広げると一体になるように配置された一本の木が印象的。タイトルは金色の箔押し。字体を見ると、野の字の「予」の部分がアレンジされている。

構造予想

○折丁

大きな用紙に両面四ページ（計八ページ）印刷し、折りたたみ、それらを重ねて作られている。



○丁合

公演時の写真が載せられたページは、活版で処理できないため、別に判紙を作り、入れ込まれている。

○綴じ

背から二、三ミリの位置で綴じられている。糸かがり綴じの一種で現代では中々見られない綴じ方。機械生産による進化形としては「平綴じ」が考えられる。

感想

この『裾野』、少なからぬ生産量がありそうな雰囲気を感じますが、手作業を感じさせる細部が沢山あり、製本過程に興味が湧きます。グラフィックの可愛さと、表裏の切替えアイデアには時代を超えて納得させられました。

ページ内に割り振られている写真ページの位置が規則的なことから、現代で用いられる「折丁」はこの頃から共通だったものと思われる。その工程はどんなものだったのだろう。興味は膨らむばかりでした。

菊地 充洋（きくち みつひろ）

仙台にて四代続く老舗製本会社勤務。「製本研究班」を通して、代々、技術継承が行き届かなかった部分を過去の資料から検証していきたいと思っている。

斧澤 未知子（おのざわ みおこ）

東北大学大学院の教育プログラム「せんだいスクール・オブ・デザイン」で、珍妙な装幀の雑誌制作を行う授業をアシストしてきた。本は苦手だが本という形式には興味津々である。

発行のお知らせ

「大佛次郎（おさらぎ） 大池唯雄（ただお） 往復書簡集」発行

昨年の十一月二十二日から今年の一月二十五日まで開催した企画展「大佛次郎　大池唯雄　こころの往復書簡」。この展示に合わせ、ご遺族のご承諾をいただき、一〇〇通を超える往復書簡を翻刻した書簡集を発行しました。「一人でもいゝ作家の出てくれること」を願い、「…難しい仕事なのは女のお産と同じことです　いゝ子を生むことです」とユーモアを交えながら、大池をあたたかく時に厳しく導いた大佛。「…これにお応へする道はただだよいものを書くこと以外にはございません」と、大佛を師と仰ぎ精進を続けた大池。二人の交流の軌跡、そして戦前・戦中・戦後を生きた作家のこころのあり様をたどることができます。五五〇円（税別）。当館の受付でお求めいただけます。また郵送販売も行っています。

企画展

「俺達（おれら）の国語ば可愛（めんご）がれ～井上ひさし『方言』へのまなざし」

井上ひさし資料特集展 Vol.4

会期：2月7日（土）～4月19日（日）
観覧料：一般500円、高校生200円、小・中学生100円

生涯にわたって「ことば」についてこだわった井上ひさし。今回は「方言」をテーマに『國語元年』、『雨』、『吉里吉里人』などを取り上げています。「小さな共同体の言葉＝方言」を糸口にしながら、普遍的・歴史的・社会的命題や、運命に翻弄される人間の姿を、愉快にわかりやすく、そして哀感をこめて描いた作者の執筆過程、想像力の痕跡を、現在残されている原稿や創作メモ、そして遅筆堂文庫に所蔵されている、方言・言語関係の資料からたどります。

会期中のイベント

（参加を希望される方は仙台文学館にお問合せください）

展示室劇場（リーディング）
『吉里吉里人』（抜粋：第二章）
出演：ウィリーささき。
（日本朗読検定協会認定プロフェッサー講師）
日時：三月二十一日（土・祝）十四時～、四月十二日（日）十四時～

『花石物語』（抜粋）
出演：前田有作
（俳優、演出家、情動療法士）
日時：三月二十九日（日）十一時～（三章）、十四時～（四章）
定員：各三〇名（先着）

＊展示観覧券が必要です。

対談「井上ひさし作品の魅力」
ゲスト：山口昭男
（元・岩波書店代表取締役社長）
聞き手：小森陽一
（東京大学大学院教授）
日時：四月五日（日）十三時三〇分～
定員：一〇〇名（先着）
＊展示観覧券の半券が必要です。

ウィリーささき。

前田有作

好評発売中

仙台文学館ミュージアムグッズ入荷

このたび新しいミュージアムグッズが入荷しました。仙台市在住の押し花作家・大友泰子さんの押し花絵はがきです。大友さんは東日本大震災で失われた東六郷のご自宅跡で草花を育て、その草花を押し花にして作品に仕上げています。小さな花を一つ一つ丁寧にあしらった絵はがきは、当館館長小池光が詠んだ花の歌や、在仙の詩人武田こうじさんの詩を刷り込んだしおりと一緒に販売しています。二五〇円（税別）限定五〇枚。また在仙の手芸作家もえぎはるなさんのビーズのブックマークも入荷しました。こちらは五〇〇円（税別）限定二〇点です。どうぞお早めに。

文学館友の会十五周年

文学館友の会は、文学館を応援していこうという市民の方々が集い、開館の年に発足しました。年三回の会報の発行、隣県の文学館を訪ねる施設見学会、読書会などの自主企画を行っています。会報第四十六号（平成二十六年十一月発行）は十五周年記念特集として発行し、会員六名が編集を担当しました。さまざまな意見を出し合いながら内容を検討、終始楽しく編集作業を行い、佐伯一麦さんを迎えての十五周年を語り合う座談会記事などを盛り込んだ充実した紙面になりました。友の会はどなたでも入会いただけます。現在、平成二十七年度の会員申込を受付中です。

友の会事務局
伊藤美菜子